

社会的事実の説明-メディア、アノミー、サイレン、自殺 : A・ギデنزとN・スメルサー

著者名(日)	池村 六郎
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	4
ページ	39-48
発行年	2004-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000542/

池村 六郎

文化政策学部文化政策学科

Rokuro IKEMURA

Faculty of Cultural Policy
and Management

Department of Regional
Cultural Policy

and Management

ものごとには、常に複合的な原因がある。軽いコトバを残しネットを利用して自殺する者、あるいは自死について考えると、自死をめぐる社会的で外在的な事実と、眼前の結果のあいだには、日常の謎についてと同様に、まだまだ貧弱な推論の束があるにすぎない。一般に、自己満足的で急な説明（の要求）は、現在日本社会にはびこる反知性主義・教養の否定と無縁ではない。

Things or causes are complicated, compound and we see multiple realities; what will be, will be, said a suicide or one taking one's own life, communicated in Internet. Between external social facts and events under our own very nose, there's a bundle of speculations still poor and meager, with suicide as well as with our own everyday riddles. In general, anti-intellectualism or culture-abusing in Japanese people today has much to do with such a demanding impatient self-satisfied explanation.

1) ネットでの共同自殺

メディアは、ギリシャ神話の妖怪サイレーンのように、歌声で魅惑しては近づく船乗りたちを溺れさせるのであろうか。

自殺は、現代日本社会の状況を物語るように増えている。自殺者の数は、かなり前から交通事故による死者の数をはるかに凌駕しており、交通事故死が1万人以下となって安全対策の成果をあげているのに、自殺統計は、数年前から3万人を超え、実際の数となるとさらに多いにちがいない。自殺防止に、講ずべき安全対策はないかのようである。

自殺者は、何らかの事情により注目される人物が有名人でないかぎり、報道されることはほとんどない。自殺が日常の場面で語られるとしたら、現代日本社会での現象云々というようなかたちで、統計数字に姿を変えてである。そのような統計数字に姿を変える前の状態でわれわれの眼前にあらわれるとしたら、身近な者の自殺か、それとも、偶然に目撃する自殺として、である。最近、ネットによって互いに結ばれただけで、それまで何の関係もなかった者たちが、目張りをした部屋や自動車の中という閉ざされた空間で一緒に死んでいる、つまりは共同の自殺をしたらしいという「事件報道」が続いた。人々は、どうやらあらためてネット社会のこわさを語り合い、どうしてそのような自殺をするのだろうか、分からないなどと語り合ったことであろう。

身近な者の自殺ほど耐えがたく辛いことはない。身近に生じた自殺、あるいは自死については、その（納得できるような）原因を求めて、残された者たちは煩悶するしかなく、歳月が癒してくれるころには、原因究明などどうでもよくなって、ただその死を受け入れるようになっていく。だが、報道された自殺や、

さらにはそのような報道に刺激されたか誘発されて生じたらしい類似の自殺が続くと、われわれは慌て始める。ネットや報道が、原因ではないのか、原因でないにしても限りなく原因に近いにちがいないと、いわば血が騒ぐのである。血が騒ぐというメタファーには不謹慎な含みがあるかもしれない。だが、これまでにも、何らかの凶行事件に際して、その直前のテレビ番組に暴力場面や凶器を弄ぶ場面があり、それを見ていたらしい容疑者が現実生活で凶行に及んだと報道されると、多くの人がメディア（テレビ番組）の責任を追及してきた。血が騒ぐというメタファーの当否はともかくも常に繰り返されている（いわばお定まりの）原因・責任追及の設定である。

あるいは、いわゆる「ネットで共同自殺」については、多くの人は、原因についてのこのような短絡した判断をしていないかもしれない。短絡的でない判断とは、どんなメディアもそれ以上でもなければ、それ以下でもないという冷静な判断のことである。いわゆる「自殺を誘うサイト」については、それを報道することもふくめて、自殺者を出すひとつの誘因と考えてよいであろうが、それ以上ではないという認識（あるいは熟慮）である。つまりは、そのような自殺志願者は、「自殺サイト」がなければ、それ以後の人生において他の誘因で別々に自殺をはかるかもしれないし、その場合には、推定原因についての曖昧な統計数字に埋もれてしまうだけであろう、と。もちろん言い添えれば、このようなネット利用の自死は、死のうとする者の最後の自己顕示であっても、残された身近な者にすればさらに辛さが増すだけであろう。短絡した判断は広がっていないのだろうか。以下の考察では、ものごとには、常に複合的な原因があるのだということ、自殺、あるいは自死は、われわ

れの日常のほとんどの行動・振る舞いにかかわる問題もそうなのだが、納得のゆくような説明をえようとしても、社会的で外在的な事実と、悲惨な眼前の結果のあいだに、一般化されて蓋然性のみが頼りの推論の束、(あるいは見ようによれば)ただ貧弱な推論の束が横たわっているにすぎないということを述べる。

自殺を自死と言い換えたりしているように、筆者は必ずしも自ら選ぶ死を「自らを殺すこと」とは考えていない。なるほど、われわれのまわりの現実では、自分を殺すついでに、いたいけな他者をまきこんだような事件が生じているとしても、あらゆる自死が「自らを殺す行為」と呼ばなければならないいわれはない。古い時代でなくても、日本社会ではある条件の下では自己の命を絶つことを称える習いがある。古い時代なら、武士にとって切腹は、ただの腹切りでなく、こといたれば回避できない形式であったし、心中物で流麗に描かれた心中とは、そもそも心をひとつにしてひとつ違の台に乗る、裏切りのない状態(互いの死こそ、その最高の担保)ということであった。今日でも、母と子が心中するのを悲しんでも、そのような死を罵らないのが日本社会での、伝統的でそれなりに支持されている受けとめ方である。普遍的な人権思想よりも、感情的な同一化の方が優先されているわけで、これを、進んでいないとか遅れているといった評価はまた別のことである。ともかくも、人が選んだ「ある振る舞い」を無条件的に絶対的に〈悪〉と見なすのは、ただの宗教的な(キリスト教的な)断罪に過ぎない⁽¹⁾。身近な自死に対して、残された者が時には罵倒することでしか癒されないことがあるとしても、それはそれであり、これはこれであるから。(たとえば、末期の癌患者に、安楽死＝自死がゆるされないのであろうか。)

2) ものごとを過程として、まずは把握しよう

自死／自殺には、それへと至る過程がある。

マスヒステリーなどの集合行動について、その準備状態や直接的な誘因などを、概念的な次元にそくして整理して、価値付加過程として理解しようというスメルサーの「集合行

動論」は、そのパーソンズ的な概念枠組みについて保留するなら(さらには、決定論的な単純さへの配慮をとまうなら)妥当な考え方だと思う⁽²⁾。目下の筆者は、緻密な議論よりも妥当な議論を好んでいる。論理的に混乱していないなら、なお結構である。さらには、真の、あるいは唯一の原因は、われわれの求める答えとはなりえない。多元的な現実を生きるわれわれにとって、日常生活の世界は、たしかに至高の現実を提供しているわけであるが、それとて絶対的な至高性ではないからである。雷に打たれて死んだ友人の、死の原因に悩んで修道院に入ったというルターなら、精神を病んで自死にいたる者や薬物中毒の果てに禁断症状で自死をする中毒者について、その真の原因について考えることであろう。

他者の行為について、われわれが信じ込んでいる暗黙裏の前提には、21世紀と19世紀(あるいは、それ以前)が混在しているようである⁽³⁾。無意識の暗部を探りあてながら、無意識的な領域について、それを隠されてはいても物質的な量と見なして、石炭か石油のように操作的に処理できるという思いこみである。J・D・ダグラスの説やギデンスの吟味をもとにあげると以下ようになる。

- ①われわれのすべての行為は、社会的に大なり小なりそれなりに共有されているような「意味(づけ)」によって惹起される、あるいは動機づけられている。
- ②他者の行為は、理解できるし、知っている。
- ③行為の意味は、物理的な変数と同じように数的な処理の対象となる。
- ④われわれは、人間の自由な意志を信じて、それに基づいて政治やその他様々な組織や制度の根本理念としているけれども、自殺などについては、まったくの決定論者となる。(もっとも、決定論といえども、哲学ならいざ知らず、われわれの日常的推論では、相対的にそうなりやすいと表現する方が穏当であろう。)

近年の自死の増加は、集合的な社会現象と見なすべきであろうか。用語としては集合行動とは、何らかのファッションや投資ブームや拉致問題への急激な関心やその他の多数の

熱狂をさしている。だが、パンゲによれば、列強の侵略下におかれていたかつての中国で、自死が急激に増えたという⁽⁴⁾。パンゲの文脈から想定すると、当時の中国の都市社会では、信念体系の瓦解・弛緩・分裂といった、いわゆるアノミー概念の格好の適用例が生じていたようである。きわめて孤独に（普通には）他者との交渉や相互刺激もなく行われる自殺という行為にも、集合的な観点でとらえられる面がある。

ちなみに、以下の記述で、アノミー概念に言及するが、規範のない状態という直訳では誤解を生じるだろう。価値観や（おおむねそれに準拠して形成されている）日常の規範は、決してすっかりなくなったりはしないからである。ある価値観や信念体系が、急速に支持・信奉を減衰させることはある。その場合、何かほかの価値観が入り込んでいるかもしれない。新旧の対立、入れ替わりの事象としては、敗戦後の日本社会などがそのような例となる。対立葛藤のアノミーであろう。さらには、敗戦日本のような例は、一夜にして入れ替わったような急激な変化であり、急性のアノミーと呼ぶ人もいる⁽⁵⁾。次第に、社会の価値観が緩慢に支持や信奉を喪失しつつ、新しい価値観や代替の価値観が現れないこともある。性をめぐることや、死をめぐる問題では、民俗的・宗教的な支えを喪失して、それに代わるような納得の図式を現代日本人は持ち得ないようであるから、このような慢性的アノミーの中に生きている。集団や社会の規模についても触れておこう。社会全体として、あるいは規模が大きな集団において、価値観や規範の緩み、支持・信奉の減衰が生じるだけではない。何らかの相対的に小さな集団や個人的な場面でも、喪失・減衰状態が生じる。集団のモラルの低下などはそのような例である。しかし、ひとりの個人については、もはや、個人的内面化の問題として考えるべきであろうから、個人的アノミーのような概念化は立てないでおこう。

デュルケム『自殺論』の、その限界や古典的な位置づけについては、ここでは問題としない。この古典的な研究については、宮島喬のいくつもの著作があるので、それを参照されたい⁽⁶⁾。デュルケムをめぐるギデンズの所

説は、以下の記述では直接の言及をしないが、社会像について多くの示唆を受けていることを記しておく⁽⁷⁾。

一般的な社会学的自殺論を紹介しつつ、自死／自殺へと至る過程を考えよう（なお、以下の文章では、慣用にしたいが、なるべく「自殺」という表現で統一しておくが、時には、異化作用を期待して「自死」も用いることになる）。

自殺は、その社会的な前提条件、あるいは準備状態（＝自殺へと送り出す非個人的な、つまりは社会的な傾向）と、直接的な動機付け（＝自殺へと誘い出す要素）の足し算、あるいは掛け算で生じる。もっとも、このような表現だと、算数や数学での正確さを期待させるだろうから、化学的な混合の方が、まだしも近いメタファーかもしれない。

ここでのポイントは、その社会的な前提条件（＝自殺へと送り出す傾向）と、直接的な動機付け（＝よく使われる概念としては「促進要因」あるいは「誘因」である）とを区別して考える必要があるということである。促進要因としては、子供だと、環境ストレス、例えば親の叱責などの家庭的なトラブル、友人関係のトラブル、若者だと受験や恋愛などの個人的悩みなどが挙げられる。実際にはこれらは複合的に絡みあっていることが多い。社会人だと、仕事上の悩みや家庭問題、老年だと病気や身体の不調などである。

複合的に絡みあっているであろうと述べたが、これにはさらに含意がある。検死官などによる動機付けの解明と記録として残される資料は、実際にはその時代や地域における理解の「はまる型」にそって取捨選択され記述されやすいということだ。動機の探求からは、より深い理解に進みにくいということでもある（後で述べるように、「はまる型」に流し込んで「理解」が共有されてしまいがちである。言葉の響きにも「殺意」の脅しさを含んだ「自殺」となる）。

社会的な前提条件が昂じている状態だと、直接的な動機付けが低くても自殺を図るし、前提条件が低いと、直接的な動機付けが高そうに見えても、自殺には至らない。つまりは、まわりから観察して、個人的にストレスがきわめて高い場合でも、死なない人は（死なせ

ない社会では) 死なない。条件をふたつに分けて、それらの掛け算や足し算で考えようというのだが、もちろん、ほとんど個人的な条件のみでの自殺もありえないわけでない。精神的な錯乱の昂進による自殺は、そのような場合の典型だといえよう。ただし、麻薬乱用などによる錯乱だと、どうして麻薬に染まったのかという点で、やはり、足し算・掛け算で考えるべき場合となるにちがいない。とはいえ、ふたたび念を押せば、足し算や掛け算というメタファーを独り歩きさせて、決定論的な計算がいずれは可能になると言いたいわけではない。

おもに社会的な前提条件について、一般的な考え方を、私の理解でまとめれば以下のようなになる。

社会について、ふたつの面で把握してみる。これらふたつの面しか見えないというわけではないが、見通しをよくするために、ふたつの面に抽象化して捉えるわけである。ひとつは、諸個人が結ぶ人間関係の網の目、あるいは言い換えれば、(誕生日前から) 結ばされている関係性の網の目、自発的に結ぶ網の目である。(法執行や権力ピラミッドなどと諸個人との関わりについては、このような網の目という形でのみ掬い取るわけである。) もうひとつは、諸個人が行動する際に意識的に、あるいはもっと多くの時間においてあまり意識もせず、いやまったく意識もせずに準拠している価値基準や規範である。いずれも、集団的・共同的でありながら、個々の振る舞いの中で、ニュアンスにとんだ変容や変形をとまなっている。

これらふたつの大事な面において、いずれか、あるいは両方とも「過度」となると、自殺への前提条件は高まる。かつての集団本位の社会や、閉鎖的で強権的な社会を思い浮かべればよい。そこでは、諸個人が結ぶ人間関係の網の目(その多くは、人間関係の制度化された結びつきである)や、価値観や(価値観に応じた) 規範の内面化が、あまりにも高いので、さらに条件がそろろうと(身分に応じた不面目の出来とそれへの追及など)、当人が厭でも自殺を奨励され、あるいは義務感情が働いて自殺、あるいは自死をすることになった。かつての日本での殉死や切腹、あるいは

犠牲的な死がそのような自死の例である。現代でも日本に多い「家族の心中」などは、このような「共同の自殺」である。

逆に、社会的に弛んだ状態、つまりは人間関係の網の目が散漫となり(バラバラな諸個人、アトム化した諸個人という光景を思い浮かべていただこう)、価値観や規範の内面化にも不具合が生じるとどうなるか(一方では、成功や競争をあまりながら、他方では、失敗・挫折についての「納得」の図式をあたえていないといったような場合である)。このような状態が過度に進行すると、諸個人は失意や失敗などをひとりで抱え込み、(株で失敗して、あるいは離婚して) それから逃れるための孤独で個人的な選択として(引き留める「監視・慰謝」の目も少なくして) 自殺を選んだりする。ちなみに離婚による自殺は男性が多いとされている。

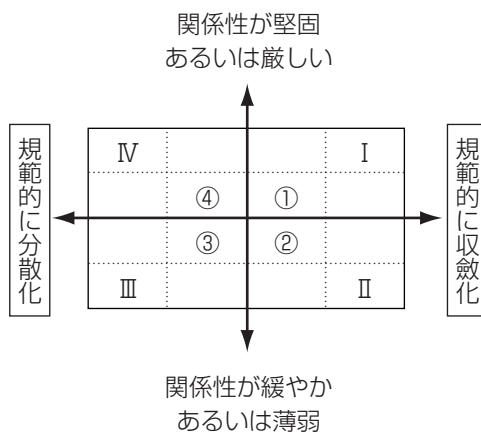
家族本位は、それが過度であると、他の致命的な条件が重なった場合に、心中などの「共同の自殺」をもたらすが、そうでないかぎりには、寂しさによる自殺を防ぐわけである。ものごとは過ぎると、良くも悪くも諸刃の刃となりうる例であろう。さらには、社会的な価値観や規範が弛んでくると(=アノミー状態の社会で)、生きる方向付けを失わせ、自殺者を増やすだろう。もし、人間的な結びつき・網の目が少なくして関係性も淡泊で弱いなら、さらには、価値観や規範の弛みや乱れ(対立や競争・葛藤)、つまりはアノミー的な状況ということになると(後述するエンロン事件などアメリカ社会での事例のように、成功目標に強迫的なまでに志向性が高く、それゆえに日常的規範の逸脱や日常そのものの基盤の破壊をもたらしたりすると)、さらに自殺への前提条件は高まるわけである(もちろん、多くの人はこうなっても死んだりしない)。

すでに述べたように、生理的・心理的なトラブルをまったく無視するわけにはゆかない。誤解を生じては困るが、一般によく言われる例としては、鬱病による自殺、薬物中毒による破滅的な自殺があるだろう。見方によれば、アルコール中毒による病死は緩慢な自殺だと考えることもできるし、個人的には筆者は、ある友人の病死をそのような例であろうと考えている。季節的な要因もあって、季節の変わ

り目にはだれしも心身の変調を感じるようであるし、筆者を含め、そのような傾向がとりわけ高い人がいることも確かである。まとめると、一般的に、高齢者、女子より男子、既婚者よりも独身者や離・死別者、農村住民より都市住民、季節としては春に自殺率が高いというのが、教科書的な理解である。よく社会学で用いる概念化としては、「社会的統合」が低く（集団本位というより個人本位で）、アノミー化しつつある状況にある人々、つまりは現代日本の都市に住む、高齢の離婚男性の自殺率は相対的に高くなる（言うまでもないが、そのような人のほとんどは自殺したりしないが）。このような社会的な背景のもとで、さらに直接的な動機付けがあれば、自殺の可能性が相対的には増すということになる。男性には、何だか気の滅入る説である。念のために言い添えれば、「社会的統合」という概念は便利だが、あまりにも多くの問題を含んだ概念であるので、具体的な「人と人との関係の濃さや薄さ」や「行動の指針＝規範の揺らぎ」というように、具象的に言い換えている。

3) 社会や集団の類型論の試み

参考までに、ひと昔前に流行ったような図式的な軸を縦横に並べて、社会的な類型化を試みよう。それぞれの極端な常態（I～IV）が、自殺への前提条件となるのを想像してもらいたい。（詳細な議論を展開するのは別の機会にしたい。）



この図での「規範的に・・・」には便宜的に価値観の面も入れてある。I, II, III, IVは、ある社会や集団において、それぞれの側面や要素が極端になった場合として図示してある。これらにくらべ、①から④は、それぞれの側面や要素が相対的にゆるやかな場合としてある。

Iのような社会や集団だと、一挙手一投足がいわば見張られているようなわけだし、準拠すべきルールでも同質性が高い。部族的な集団であり、外部からは圧政や強権支配のように見えながら内部の者たちは指導者や権威を称えることを心底嬉しがっているようにも見えるし、事実、そうであろう。IIのような社会だと、同じような振る舞い方をしながら、他者への干渉や他者との歩調は必ずしも一律でない。好き勝手に振る舞っているようでありながら、同じ方向を目指している（価値づけられた目標や選択すべき手段などについての合意が高い）。IIIのような社会だと、考え方や感じ方で人々は互いに歩調が合わず、しかも、合わない歩調を合わせようという作用もあまり働かない。IVのような社会だと、人々の考えや感じ方はバラバラなのに、同一歩調で同じ方向へと歩ませる作用が強力で、従わなければ社会の外へ弾き出されることになるが、たぶん、関係性の強さゆえに社会や集団が維持されているわけで、そこに生きているかぎりには、とくに違和感もなく、いわば囚人の平和を享受することになる。

日本社会の中にも、地域や階層でこれらの型がそれぞれ見られるようである。とはいえ、地域ごとに強引にあてはめない方がよいだろう。ある県民が皆、同じ類型に属していると主張する人は、そのような特質だけを現実のその県の（見知った）住人たちから選択的に認知しているに過ぎない。社会圏の交叉については言うまでもないが、現代社会では諸個人は、複数（多数）帰属状態であり、ある集団に属して行動している時間帯には、ある類型で行動するのを適格的だと判断してそのように振る舞い、別の集団に属している時間帯では、別の類型で振る舞うのを適格的だと判断してそのように振る舞っているだろう。しかも、適格的と判断しているのはその当人であり、ふたつの集団での振る舞い方からまた

らされる不満や満足が、相補的であるようなことは珍しくない。ふたつの集団での振る舞い方を入れ替えたら、また別の様相の適合性が見いだされるかもしれないのである。

われわれにとって、北朝鮮という国家や社会は、Ⅰの見本のように感じられる。だが、脱北者がいるわけだし、闇市経済が統制経済を凌駕してしまっているわけである。このことの意味は二重である。ひとつは、いずれの側面や要素についても、過度になるとパラドクスが生じてしまうということ、もうひとつは、その地に生きる諸個人には単純な概括化や画一的な決めつけは禁物だということである。

競争をあおり、競争のための機会平等をかかげるアメリカ社会は、Ⅱや②の社会に見える。しかし、あまりに成功や競争をあおる社会にあって、成功目標を達成するための手段は決して平等であるわけではないし、目標の途方もなさにくらべて妥当な手段を守らせるための規範がさほど内面化されているわけではない⁽⁹⁾。エンロンのような大企業詐欺は常態でもある。他の社会なら、犯罪的行為に走らないような規範的人物でも、目標への焦りから犯罪的逸脱に手を染める。Ⅱの社会であるゆえに、Ⅲの方向へと人々を向かわせるパラドクスが働いているわけで、常にアノミー化への傾向があり、それへの対処が必要となる。諸個人を関係性の締めつけで繋ぎとめているⅣのような社会は言うまでもなく、部族社会でもないのに強権的に維持されているⅠの社会も、さらにはⅡの社会も、アノミーと孤独のⅢの社会へと向かわせる素因に満ちている。

ある仮説が考えられる。①やⅠのような状態から、「しめつけ」の緩み開かれた②やⅡの状態へ、さらには、内面的な分散化が生じてしまっている③やⅢの状態をへて、これではいけないと、④やⅣの「しめつけ」の強化された状態へと、社会的な様相が周期的に、あるいは集団の加齢により移動するという仮説である。そのようなことがありうるし、現実にもそうかもしれない。だが、このようなパーソナルの位相運動 (phase movement)⁽⁹⁾ の類の仮説は、しばしば現実を概念にあわせるような強引さをともなう。もっとも、家族周期論からすれば、幸せな結婚に始まる①から自分も大事にする②へ、さらには自分しか

大事にできない③へ、ついには定年離婚までの我慢の④へと位相が移動するものだということになるかもしれない⁽¹⁰⁾。

実際には、同好会であれ企業であれ、いずれかの位相を居心地のよい状態として、安定化していることだろう。企業が、右側の位相にないとすれば、企業統治 (corporate governance) に問題があるわけだし、同好会は、企業にくらべれば左側の位相に位置することだろう。日本や韓国やアメリカといった社会の差異による変化よりも、それぞれの集団の目的とすること次第で位置づけが変わると考えてよい。

位相の変化については、ひと世代くらいの比較的短い時間でなら考えやすい。長い時間の歴史的な変動は視野の外に置こう。集団は、位相の変動を嫌うようである。つまりは、どんな集団も簡単には変身しない。大きく日本社会、あるいはある地域社会で許容される範囲内では、Ⅰあるいは①であるゆえに、その特色・存在価値を周囲から認められているような集団・組織がある。大学における応援団はそのような例である。Ⅱあるいは②ゆえに存在価値がある、という集団・組織もある。かつての大学教員集団は、バラバラであっても学問 (的価値) の追究ということでⅡであることを社会的に認められ称えられてもいた。騒がしい暴走族や非行集団は、大きな社会から見れば、Ⅲの現象でしかないわけだが (それゆえに、Ⅰや①の要素の面を強化しなくてはと社会に思わせ、権力・権威から見れば貢献してくれているわけであるが)、かれらにすれば自集団は、まぎれもなく①どころか過激なⅠであり、もしそうでなくなれば、解体することであろう。それぞれ、集団には安定的な状態がある。内部にとっても (時には) 外部からしても適切な状態があることになる。

われわれの日常感覚からする想像でも、また実体験としても、自分の集団や社会が、たえず位相を変動させているようでは落ち着きが悪い。小規模な集団で位相が変化しやすいなら、その集団の権威や権力を弄びたい人物がアレコレと画策しているにちがいない。大規模な社会の例をあげれば、共産中国成立後の、百家斉放から右派闘争や文革などへ、さらには社会主義的市場経済の開放政策へと揺

れ動いた歴史の背景には、一貫して教典的で人治的な権威主義と、手中にした強権をめぐる権力闘争があったわけで、すべてはうわべの位相変化でしかなかったのかもしれない。

日本だけでなくたいの現代社会は、小さな集団や社会のレベルでは、ゆるやかに自由を感じさせつつ、社会的に大きな枠組みでは、逸脱を許さないような仕組みへと姿を変えつつあるようにも見える。IT化しつつある社会とは、じつはパナプティコン（一望監視システム）の時代なのだという主張もあるのである。

4) 積みあげられてゆく毒

前に述べた「現代日本の都市に住む、高齢の離婚男性」に戻ろう。

このような男性が、「自殺サイト」を覗いて疑似仲間と一緒に死んだとしたら、あるいはテレビ番組で自殺場面を見て縊死したとしたら、まわりの人々は、自殺の原因を「自殺サイト」や「そのテレビ番組」だと決めつけることになるのだろうか。このような男性の「事情」を知っておれば知っているほど、答えに窮するはずである。だが、「事件」が発生すると、たちまち多くの「変数」を考慮の外に投げ出した意見の方が声高に聞こえてくる。

価値付加過程 (value-added process) については簡単に述べるにとどめよう。価値付加と名付けられた過程とは、自殺へと向かわせる社会的な毒が積みあげられてゆく過程のことだと理解していただきたい。すでに述べたような要素が、どのように付加過程で積みあげられてゆくのか。肝心なそのような過程について、筆者には計算式を提供するだけの用意はないし、スメルサーの（社会現象ごとに詳細に示された）図式を適用したとしても、今日ではもはや紹介するだけの魅力がないかもしれない。その図式とは、たとえば以下のような項目を①から⑤へと水辺軸に並べて、行為を潜在的状態から顕在的結果へと算出する図式なのだが、これではナイーブな決定論という誹りを受けることになるにちがいない。それでも、これらの項目が、われわれの留意すべき項目であることは確かである。

- ①価値観や規範の揺らぎ
- ②それらの要素の、たとえば新旧の葛藤
- ③価値観や規範の対立（というかたちをとった実は利害の闘争）
- ④価値づけられた目標とされる何かと、現実
にそれを達成するうえで可能な手段のバランス
- ⑤ある個人がたまたま置かれている状況の確かさ、便宜提供の度合い、機会平等かどうか、人間関係の網の目にかかわるあらゆる課題

自殺、あるいは自死をめぐる原因追及・追究という観点からは、これら大状況的問題からある個人の周辺的問題へと、チェック項目を並べてゆくことになるだろう。

価値観や規範という項については、その統合性や矛盾・対立について、安易に即断するのは禁物である。矛盾や対立のように見えて、そうでないことが多いからである。現在の日本で、女性の社会的進出をめぐるのは、保守的立場の政治家などからの「家庭を守れ／家庭を守れ」という意見があり、当然それらを支持する街角の意見もある。だが、これらは、実はそのような進出で脅かされるかもしれないという危惧、つまりは利害・権益を懸念する側と、潜在的に脅威となりつつある側との社会的葛藤にほかならない。価値観や規範の対立のように演出されているけれども、そうではないだろう。信念体系の対立、あるいは理念や価値観の対立と見なされたり、時には道徳的墮落という非難がなされたりするけれども、そこには利害・権益をめぐる争いが隠蔽されている。

古い世代の男性たちと、社会進出を目指す（ある部類の）若い女性たちは、実際には価値観や規範という面で矛盾・対立しているばかりではないだろう。社会的認知と成功モデルの追求という面では、同じ平面を共有しているのかもしれないのである。むしろ、後述するように、他の部類の若い女性たちや一般に暢気な若者たちの方こそ、年長者にとっての矛盾・対立の軸を多く抱えている。

以上の諸項目は、見てのとおり、社会にとって基底的で一般性の高いものから、諸個人にとって偶有的で個別的で変化しやすいものへ

と配列してある。だが、これらが互いにどのような連関をしているかについては、もはや語りえない。ほとんど常識的な、次元・位相の差異をもとに、並べるしかできないのである。だが、指摘しなければならない問題は、繰り返すようだが、別なところにある。

社会は、常に単一の価値観や規範で営まれているというような思いこみが今なお抱かれていますのは実に不思議なことである。理論的にも現実感覚としても奇妙である。対立や葛藤は常にあるし、実際にもあった。われわれは個人的に悩んだりすると、かつての人々は、どうして錯乱もせず、自死にもいたらず過ごせたのであろうかとノスタルジアに耽ったりする。だが、少しでも歴史を振り返れば、これこそわれわれの思いこみであって、そのように安穩とした時代があったという前提こそ、奇妙にも子供じみた妄想でしかない。だが、なぜか、そのような「妄想」を、当たり前のように了解しあっているし、眼前の衝撃的な事象を説明しようとして、それができないと八つ当たりのように「何か」を攻撃する。このようなことこそ、われわれの時代の特色かもしれない。

そのような「何か」が、この世のものでなく悪霊や物の怪であった時代なら、この世とあの世との隔絶性でもってわれわれの意識は向きを変え、すべては一件落着であったろう。だが、この世の中に、つまりは可視的なわれわれの世界の中に悪霊や物の怪を求めて狂奔するのは、ブッシュのアメリカだけではない。われわれ日本社会にも、そのような余裕のなさが忍び寄りつつある。

素人の直感で述べれば、この社会が今日かかえている何よりの問題は、社会に当然存在していいはずの能動的な対立・矛盾を、社会の原動力として生かしていないことにあるように思えてならない。生産性の乏しい田舎と、凝集力の高い都市のあいだには、対立・矛盾がなければおかしい。それを、ないかのように思わせることの適合性は、かつての日本社会にもあったのであろうが、そのような部分適合性、というより狭い見での地域にとってでしかない適合性の神話を、もはや維持する必要はないだろう。部分適合性と全体適合性の一致という神話の畏、にほかならない。わ

れわれの周囲でも、異質な要素を見たくもない（気の合う仲間だけで固まりあう）という痩せ衰えた心性がそこかしこに見えている。子供が気の合うもの同士で固まって日向ぼっこをしているのは、微笑ましい情景であるけれども、中高年の見識面をした者たちが、仲間うちだけで他者を排除して固まりあうのは醜悪である。だが、自分の了見の中で、矛盾や対立のない幼児的な「平和」を、(幼児ではない)オトナの狡知で画策しようとする者が、口先では、なにやらひと時代前の「進歩的な」意見を開陳したりする。

世代間や信念体系についても、矛盾や対立を受け入れ、認知することこそ、必要なことであろう。世代間の接触頻度の低下は、別々の信念体系の余地をはぐくんでゆかし、また、生じたかもしれない軋轢をも低減させている。認知的不協和の困惑に陥りたくないのが、メソポタミアの昔から年長世代の常である。だが、多くの若者たちの生態が変貌しつつあることを甘受した方がよい。競争意欲の乏しくなった若者に、競争意欲を掻き立てるための場を設けてやろうとすべきではないらしい。まさに要らぬお世話の焼き豆腐、であって、筆者の世代のように競争せよと督励してもダメらしいのである。かれらは、この社会の危機的状況を予感しても呆然と何もする気がなさそうに見える。しかし、好きなことはしたいらしい。よく知られたことだが、日本経済のかつての花形産業・鉄鋼の売り上げに対して、その二倍の売り上げ、それが漫画やアニメといった受験秀才とは対極にいるような人々が成し遂げつつあることである。このような人々にとっては、他者との競争が生きる意欲の燃料ではないらしいのである。かつての世代にとっては適合的であったような心性も、別の時代には少しも適合的ではなくなる、これこそ、われわれが知るべきことなのであろう。

5) 説明には、はまる型がある

この社会には、それぞれ地域であれ集団であれ、あるいは全体としての日本社会であれ(ちなみに、マス・メディアが、そのような大きさの社会を可視的にしているのだが・・・)、

どんな社会にも、役まわりということがある。英雄・悪漢・馬鹿・道化者・見物人・評論家・悪魔や化身といった役まわりである⁽¹¹⁾。企業であれ、役所や組合であれ、NPO であれ、大学であれ、人が集まっているところでは、関係性の持続と密度に比例して、それぞれが割り振られてゆく。もし、英雄が欠けたなら、だれかが英雄か、英雄もどきにならなくてはならない。道化が欠けたら、欠員補充で、虐められるような役まわりを誰かが引き受けさせられ、あるいは、そのような道化役ゆえにだれもが気づかない問題を、意表をついて指摘することになる。英雄的な人物が英雄になるというわけではなく、道化的な人物が道化になるというわけでもなくて、そのような役まわりになった人物が、そのような人物像に「はまってゆく」という発想が、この考え方の妙味である。一半の真実があると考えるか、それとも、まったくの真実だと感心するかは、好みに任せるしかないのだが、血液型という得体の知れない分類と予言についての、俗信や、その影響力を考えると、この考え方には、ずいぶんと学んでほしいところがある。

和歌山の砒素による毒殺事件では、女性容疑者は希代の悪女という役割でマス・メディアに登場していた。筆者も、この容疑者の顔貌にはいかにもそれらしいという印象を持ったが、これこそ、曲者であって、「松本サリン事件」の第 1 容疑者は、いかにメディアによってそれらしい雰囲気が登場させられていたかを思い出さねばならない。筆者は、正直に打ち明けるが、この冤罪被害者に対してナイーブに、メディアの定義づけ通り、疑いの目で見ている。和歌山砒素毒殺事件の容疑者にもどろう。この容疑者の顔貌への好悪は別にして、われわれ視聴者の内心の期待に添うかたちで、悪相として認知されていった。ワイドショーでは、このようなご馳走がない場合には、憎まれ役の女性タレントを賞味期限が切れるまで、「また、出ている」という視聴者の当初の反応など計算済みというように、繰り返し登場させて、視聴者を屈服させて、所期の目的を果たしている。このような悪女・悪婆・毒婦をめぐる言説は、明治の初め頃の錦絵新聞などで、ほとんど定期的に、と言っていいくらいの間隔で繰り返し登場しているよ

うである⁽¹²⁾。少し遠い時代の類似例を振り返ってみると、われわれも正気に返るにちがいないが、これら錦絵新聞を見ることなど、好事家の楽しみでしかないのが残念である。錦絵新聞に現れているのが、ほとんど昔話やグリム童話の登場人物のような存在感であるのにくらべ、テレビ時代に培われた「われわれの期待と、メディアの提供」の方は、生々しくて、われわれの守るべき日常生活にとって直接の脅威というべき存在感を示しているようである。

だが、テレビ・メディアは、みずからもそのような悪婆や毒婦、道化者や化身の類に数えられつつあることに気づき始めているだろうか。かつての社会なら、マス・メディア以外にも、メディアの多様性は保たれていたし、なにより、人間関係というチャンネルもまた多様であった。姉妹兄弟は多く、叔父叔母もまた多く、近隣の間人間関係は煩瑣というしかないような濃密さで、時には干渉がましくもあるほどの「社会」があった。それ自体としては、自殺への「濃密さゆえの前提条件」となりかねないような、関係性の過大さ、あるいは多様性があった。独り勝ちゆえに引き受けなくてはならなくなった困惑を、テレビ・メディア(とそのチャンネル)もまた味わっている⁽¹³⁾。

6) むすびに

社会には、実に多くの配役がある。人々を突き動かし誘う様々な要素がある。自死をもたらしたかもしれないメッセージ、それを媒介したとされるテレビというマス・メディアやインターネットという新奇なテクノロジーは、そのような多くの要素のほんのひとつであるに過ぎない。現代社会では、独り勝ちをしている要素である。多様性が失われつつあるらしいのは、まさに危機的なことだと考えてよい。独り勝ちのおかげで、日頃は愛玩されていながら、時には現代の「魔物」のように噂されたりする。

だが、われわれは、可視的な「何か」にのみ、目を奪われてはならない。論じることができなくても、論じる必要はなくなる。論じきれないのは、あまりに多様な要素がそこにはあるからである。「怪力乱神を論ぜず」

という戒めを現代的に読み替えば、「悪魔」をこの世の中に見ようとする事について、あてはまる。

テレビやインターネットは、ただの道具でしかない。それを扱う人々も、ただの人である。しかし、「性、相近し、習えば、相遠し」というように、人々が拵える関係性や信念体系や価値観などの疎隔・齟齬は、そこに多くの毒を発生させやすい。異なる他者への反感・嫌悪・不愉快・憎悪・怨恨などは、互いの関係性の見直しを迫り、新たな関係性の構築へと誘うことも多い。コミュニケーションにとって、否定的感情は決して有害無益ではない。否定的感情そのものではなく、むしろ否定的感情が抑えられチャンネルを失うことこそ、毒を生じさせる。われわれは、そのような毒のことをまったく知らないわけではないが、毒は、人々が拵える関係性やその所産の数だけ、多様で多面的で輻輳しているのだから、論じきれないのである。論じきれないだけであると、思わず言いたくなったが、そこまで言うてはならないだろう。

ものごとは、常に複合的に生じている。ネット利用の共同／集団自殺、あるいは自死について、インターネットの怖さが囁かれ、それを報道するテレビなどには自粛せよという意見が寄せられる。だが、自死をめぐる社会的で外在的な事実と、眼前の結果のあいだには、分からないことが多すぎる。あるいは、このような問題はそもそも分かりえないことかもしれない。分からないことに対して性急な答えを求める人々の不安はもっともであるが、自己満足的で性急な説明（の要求）は、現代の日本社会にはびこる反知性主義・教養の否定と無縁ではないのである。たぶん、筆者が期待するような教養とは、分からないことには分からないと応え、見つめるような、いわば時代に対して控えめすぎて売上げには結びつかない、反時代的なそれであろう。それでいいと、言うのみである。

1 モーリス・パンゲ『自死の日本史』竹内信夫訳・ちくま学芸文庫（誤解のないように言い添えるが、筆者のフランス人は、そのようなキリスト教的僭越さからは自由である。）

2 N.J.Smelser, *Theory of Collective Behavior*,

Routledge & Kegan Paul, London, 1967

- 3 この部分は、ギデンズによる、ダグラス説の紹介を、範囲を広げて敷衍して述べてある。A・ギデンズ『社会理論の現代像』宮島喬ほか訳・みすず書房、1986：pp.255-8
- 4 モーリス・パンゲ 前掲書
- 5 Sebastian de Grazia, *The Political Community, a study of anomie*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1948; デ・グラツィア（グレージア）による副題だと、なぜ、人は政治的宗教的存在としてしか生きられないのか、についての研究となっている。なお、急性アノミー（acute anomie）の例としては、戦後日本社会でアブレゲール（いうまでもなく「戦後（世代）」という意味である）の犯罪と呼ばれたのが、そのような事例であった。デ・グラツィアの説には、幼児期の分離—不安を出発原理としていること、社会を価値規範が単一的に統合された状態とその（信念体系の）弛緩（simple anomie）、あるいは指導者の死などによる急性アノミー（信念体系の崩壊）という概念化のように、いささか古臭いところがある。
- 6 たとえば、宮島喬『デュルケム「自殺論」を読む』（岩波セミナーブックス29）、1988や『デュルケム自殺論』有斐閣新書、1979。デュルケム『自殺論』中公文庫・中央公論新社、1985。原著は、E.Durheim, *Le Suicide*, 1897
- 7 A・ギデンズ、前掲書
- 8 R. K. マートン『社会理論と社会構造』森ほか訳・みすず書房、1961：復刊2002：R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, revised & enlarged edition, The Free Press, Glencoe, Illinois, 1957
- 9 言うまでもなく、懐かしいパーソンズの宇宙である。T. Parsons, R.F. Bales, E.S. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, The Free Press, New York, 1953
- 10 盛岡清美『家族周期論』培風館、1973：（もちろん、この書にこんな記述はない。）
- 11 このように役割演技として社会集団の機能・構造・相互理解などをとらえるのは、例えば、O.E. クラップ『英雄・悪漢・馬鹿』（仲村祥一・飯田義清訳）新泉社、1979、や、ケネス・パークの著作（Kenneth Burke, *A Grammar of Motives*, pp.24-35, University of California Press, 1969; *The Philosophy of Literary Form*, University of California Press, 1973）などから学んだことである。ただし、これらパークの著作について付言すると、知らないコトバも多いので、私の読解はかなり怪しげである。
- 12 複製でそれらの例を見ることができる。『ニュースの誕生』（木下・吉見編）東京大学出版会、1999
- 13 池村六郎『情報の回路とメディア：現代の状況』『コミュニケーション科学NO.17』東京経済大学コミュニケーション学会（香内三郎教授退任記念号）、2002